

ちはやじょう
千早城

千早城跡は、楠木正成が南北朝時代（元弘2年（1332））に築いた山城です。この城の守りは堅く、正成は少数ながら、幕府軍と互角に交えたことで広く知られています。

また、『太平記』には、わら人形に甲冑を着せるなどの様々なアイデアを用いて、幕府軍に応戦したことが記されています。

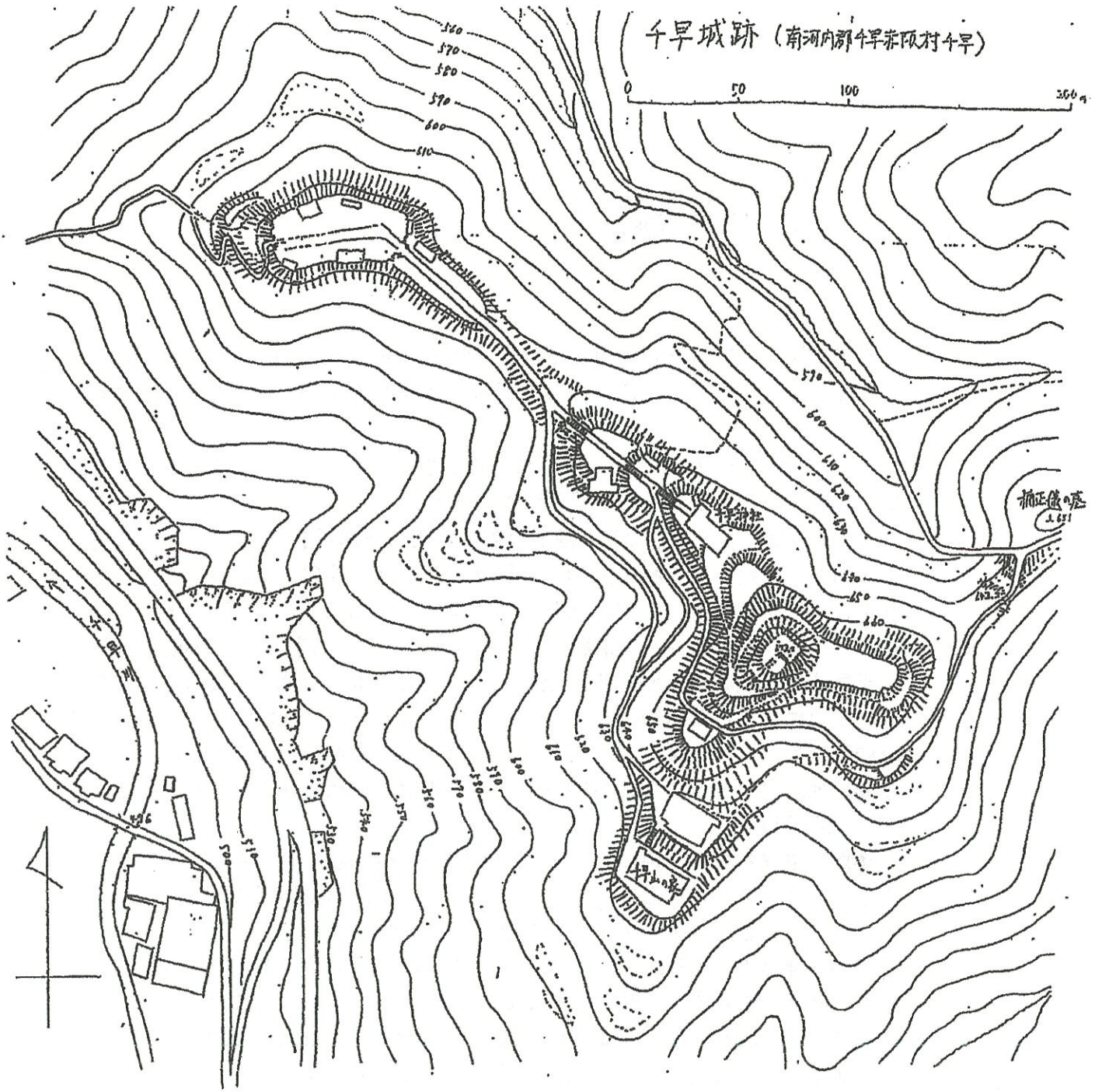
この山城は、本村の中では、最も金剛山に近い集落「千早」を見下ろす位置、金剛山から西延する支脈の先端部に位置し、周囲を北谷、風呂谷、妙見谷という深い谷に囲まれています。また、城背後の山路によって、金剛山頂へと連絡し、ひいては大和側（奈良県御所市・五條市）へと行き着くことが可能です。

千早城は、標高673mを測る主郭（本丸）を中心に、周囲の尾根に地面を人工的に平坦にならした曲輪（くるわ）を配置しています。現況では、主郭部は明瞭に平坦ではありませんが、それを取り巻く形で帯曲輪（おびくるわ）が配置され、地形にならって北西方向や南方向に曲輪を連続させる構造となっています。（裏面図参照）

また、主郭と北西方向の曲輪の間や金剛山頂へと続く北東端については、敵軍の侵入を防ぐことなどを目的とする防御施設である掘切（ほりきり）が設置されていた可能性があります。現地形からは明瞭に確認できません。

昭和9年3月13日に、本村の赤坂城跡（下赤坂城跡）・楠木城跡（上赤坂城跡）とともに国史跡に指定されました。また、平成18年4月6日には、日本城郭協会により、五稜郭（北海道）・二条城（京都府）・大阪城（大阪府）・首里城（沖縄県）などと並んで日本100名城の1つに認定されました。

○所在地	千早赤坂村大字千早
○別名	金剛山城・楠木詰城
○標高	673m.
○比高	175m
○残存遺構	曲輪
○現況地目	境内地・山林・保安林・雑種地
○史跡指定日	昭和9年3月13日



千早城跡縄張図 (村田修三氏作成)

付近見取図

